

前回の協議における論点と意見聴取から見えてきた課題

I 課題探究型の学習を推進する探究科等の設置について

(主な課題)

- ・ 課題探究等の学校設定科目を開設し、十分な授業時数を確保しながら、より高いレベルの課題探究型の学習を推進する学科等の設置が求められる。
- ・ 高大接続改革、新テストに対応できる教育課程についての検討が必要である。
- ・ 少子化の状況下で、入学する生徒の学力差が拡大しており一斉の学習指導では対応が困難なことから、普通科及び普通系専門学科の枠組みについて再検討が必要となっている。
- ・ 新たな視点として、文理融合型の学びといった新たな動きへの対応が必要である。

(意見等)

- 高大接続改革、新テストについて、合教科・科目型、総合型の内容への対策はなかなか難しい。課題探究型の学習の充実を図る必要がある。
- 探究科の設置に当たっては、県内の複数の地区への設置を検討して欲しい。
- 少子化が著しく、探究科は2クラス程度集まるか検討が必要である。1クラス程度しか集まらない地区への対応も考えなければならない。
- 探究科は1年次からの募集とし、別の教育課程で指導できた方がよい。
- 中学生の積極的なチャレンジを促すためにも、制度的に普通科との併願を認め、探究科を希望したが、合格基準を満たさなかった者は普通科の基準を上回れば普通科に合格できる仕組みを検討すべきである。
- 中学校の段階での文理選択は難しいだろう。募集時は文理混合にした方がよい。
- 普通科推薦入試は問題が大きかったので、探究科を設置する場合、専門学科になると思われるが推薦入試は実施せず生徒を募集してもらいたい。

(具体的な手立て)

① 探究科の設置・探究コースの開設

【探究科】定員 80 名・・・複数校に設置

- 普通科と探究科を併置、2学科で募集、併願を認める。
- 探究科については、2年次より国際探究科（仮称）と理数探究科（仮称）に分かれ、更に内容を充実させる。
- 課題探究に重点を置いたカリキュラムの編成

【探究コース】定員 40 名・・・複数校に設置

- 普通科の中に探究コースを設置し、募集段階でコースを選択させる。
- 普通科と普通科探究コースの併願を認める。
- 文理混合型の構成とする。

II 普通科活性化に係る教員の研修体制の在り方について

(主な課題)

- ・ 課題探究型の学習やアクティブ・ラーニングに係る教員の研修については、学校単位での職員研修会や学校視察が中心であり、成果が校内にとどまっている。
- ・ 課題の共有について中高の連携が不十分であり、互いの学習活動や学習内容についての理解が不足している。

(意見等)

- 共通の課題を抱える複数の学校を対象に、目的を焦点化した形での合同先進校視察の実施を検討してはどうか。
- 各校とも実践に向け中心となる教員を育成できれば、アクティブ・ラーニングや探究型の学習は急速に普及していく。学校の枠を超えた研修の仕組みを整え、指導スキルを共有できないか。
- 良い授業を実際に見ることが有効な研修となる。指導力に優れるスーパーティーチャーを発掘し、授業研究を進めるとともに優れた指導法の共有を図れないか。

(具体的な手立て)

- ① 探究スキルの育成に係る合同セミナーの開催
 - 各校にアクティブ・ラーニングの実践に係るプロジェクトチームを設置
 - 各校が求める探究のレベルに応じ高校をグルーピングし、合同研修を実施
 - 県教育センターによる校内研修等の支援
- ② 先進校視察の合同実施
- ③ 指導力向上のための大学等研究機関との連携
 - 大学コンソーシアムやまがたとの連携
- ④ スーパーティーチャーの発掘と授業公開の推進

III 課題探究型学習の成果の共有の在り方について

(主な課題)

- ・ 総合的な学習の時間を活用し、課題探究型の学習に取り組む普通科高校は増えてきているが、課題探究学習の成果については校内での発表にとどまっている。
- ・ 他校の生徒の発表をみる機会が少ないため、刺激がなく探究レベルが上がらない。

(意見等)

- 普通科でも探究型学習の合同発表会を実施するなど、生徒同士が切磋琢磨できる環境の整備が必要ではないか。

(具体的な手立て)

- ① 各校、校内での課題研究発表会の開催
- ② 探究科・探究コースの設置校による合同の課題研究発表会の開催
- ③ テーマ・分野ごとの課題研究発表会の開催
(例)「地域」「教育」「環境」等

IV 科学技術・理数教育の充実について

(主な課題)

- ・科学部を配置している中学校・高校が少なく、科学コンテストへの参加が少ない。
- ・科学コンテストへの参加者がSSH指定校等特定の学校に偏る傾向がある。
- ・個人でも科学技術等に関する意識を高める契機を提供する必要がある。
- ・求める探究のレベルをどこに設定するかによっては、研修による教員の指導力向上が欠かせない。

(意見等)

- 生徒の活動が科学コンテスト参加のレベルにない。この点では、探究科の設置により、探究活動が充実することで芽が育つのではないか。
- 科学部に専属で顧問を配置している学校は少ない。教員の影響を受けるので、教員の探究レベルの向上とより専門性の高い教員の配置が必要である。
- 人文・社会科学系の科学コンテストへの参加者はない。
- 大学等研究機関と連携しながら、中・高校と継続した指導を行うことで、サイエンスエリートを発掘、育成する。

(具体的な手立て)

- ① 理数分野に人文・社会分野も加えた県の科学コンテストの実施検討
- ② 全国的な科学コンテストへの参加拡大
(例)・県の課題研究発表会等の上位入賞レベルの研究を全国レベルのコンテストに参加させる取組み
・各校の課題研究グループの中に、全国的な科学コンテスト参加を目指すグループをつくる取組み

V グローバル化に対応した教育の充実について

(主な課題)

- ・人口減少社会の中で日本の国際競争力の低下が懸念される。多様性を認めながら、国際社会の中で活躍できる人材の育成が求められる。
- ・高校生が海外の文化に直接触れる機会は少ない。グローバルな視点を培う環境を整備する必要がある。
- ・外国語教育の充実としての生徒の英語力の向上は全県的な課題であり、中高合同で対応する必要がある。

(意見等)

- 総合的な学習の時間等を活用して、地域課題と絡めて国際的な課題に取り組む高校も増えている。
- 海外研修旅行により、大きな刺激を受け、帰国後の生徒の学びに対する意識が大きく変わったという事例がある。探究科の魅力づくりが必要ではないか。
- 英語力向上については、高校入学時点でのつまづきを、高校が地元の中学校と連携し、高校一年の段階での学力の状況を共有する取り組みが有効ではないか。

(具体的な手立て)

- ① 地区内中学校と連携した教科単位での学力状況の把握と情報共有
- ② 普通科における海外修学旅行、探究科における海外研修旅行等の実施
- ③ 海外姉妹校等への生徒の派遣及び海外からの高校生の受け入れ、交流の促進
- ④ 英語教育における小・中・大学等研究機関との連携の推進 (例) 鶴岡モデル